

2022. 1. 30 (日) I テモテ 4 : 7 ~ 8

4:7 俗悪で愚にもつかない作り話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分自身を鍛錬しなさい。

4:8 肉体の鍛錬も少しは有益ですが、今のいのちと来たるべきいのちを約束する敬虔は、すべてに有益です。

使徒パウロが「テモテへの手紙 (I、II)」を書いた目的の第一は、エペソ教会の牧師として悪戦苦闘しているテモテを励ますためだったと言われています。

テモテの悪戦苦闘の大きな原因は、その頃 (1 世紀中～後期) から 2 世紀にかけて地中海世界や中近東に影響を及ぼしたグノーシス主義と言われる宗教的哲学思想でした。

その大きな主張の一つは、霊的・天上的なことが善であり、肉体的・物質的・地上的なことは悪であるという「霊肉二元論」でした。

そのようなグノーシス主義的教えを〈ある人たちが〉教会の中に持ち込み、聖書の教え、使徒たちの教えと〈違った教えを説いたり〉していたようです。(1:3)

肉体的物質的なことは悪だという考えから、〈彼らは結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりし〉たのでしょう。(4:3)

しかしそのような教え (と実践) は〈惑わす霊と悪霊の教え〉(4:1) であり、〈良心が麻痺した、偽りを語る者たちの偽善によるもの〉だ(4:2) とパウロははねつけるのです。

テモテの悪戦苦闘の元となっている、聖書の教えとは違う禁欲主義 (とそれを教える偽教師たち) に対する注意を改めてした後で、テモテがいっそう〈キリスト・イエスの立派な奉仕者〉となるようにとパウロは再び励まします。(4:6)

そして、〈俗悪で愚にもつかない作り話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分自身を鍛錬しなさい。〉(7) と命じるのです。

〈俗悪で愚にもつかない作り話〉とはパウロが既に指摘した (1:3-4,4:1-3) ような異端的な間違った教えのことでしょう。

それらを〈避け (断り、除き、拒否し) なさい〉と言い、〈むしろ、敬虔のために自分自身を鍛錬しなさい。〉と言うのです。

〈信仰のことばと、自分が従ってきた良い教えのことばで〉つまり「聖書のことば、神のことばを聞いて、神と使徒たちの教えに従って」〈養われ〉なさい (6) と言うのです (「養われる」という言葉には「食物を与えられる」のほかに「自らを訓練する」という意味もあるそうです)。

その際に、〈肉体の鍛錬も少しは有益ですが〉とパウロは一言付け加えます。

〈キリスト・イエスの立派な奉仕者にな〉るために、〈肉体〉の健康を損なわず、保ち、また増進するように努めることは決して無意味なこと、無益なことではありません。

〈肉体〉の健康維持と増進のためによく食べ、運動などもして鍛えるすることは確かに〈有益〉です (「鍛錬」の言葉は元々肉体の鍛錬というときに使われた言葉だそうです)。

パウロはテモテの〈肉体〉の健康などどうでもいいと言っているではありません。

むしろとても心配して、〈これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のために、少量のぶどう酒を用いなさい。〉(5:23) と後で勧めてもいます。

そのうえで、しかしそんな〈**肉体の鍛錬**〉の〈**有益**〉さは、〈**敬虔のために自分自身を鍛錬**〉することと比べたら〈**少し（わずか）**〉でしかなく、一方で、〈**敬虔は、すべてに有益**〉だと言うのです。

〈**肉体の鍛錬**〉は〈**今の**〉、つまりほんの少し、わずかな間の、いつ突然終わるかも分からない「この世、地上」の〈**いのち**〉をそれなりに保つのが精一杯です（どんなに頑張っても結局〈**肉体**〉は弱り衰えて行きます）。

しかし〈**敬虔**〉は〈**今**〉と〈**来たるべき**〉つまり一度死んでこの世を去った後の、またキリストの再臨の後の「永遠の」〈**いのちを約束する**〉から〈**すべてに有益**〉なのです。

ここでパウロが言っている〈**敬虔**〉とは、要するに「神との正しく良い関係、神に対する正しい態度—信仰、立ち返り（悔い改め）、従順、愛、畏敬、礼拝、祈り、献身など—」のことで（それは当然、人の目に見えること以上に神の目の前でことです）。

もちろん「〈**敬虔**〉なパウロ、テモテ、そして私やあなた」が〈**いのちを約束する**〉のではありません（ましてや禁欲や宗教的苦行や善行によるものではありません）。

パウロ、テモテ、そして私やあなたに対して〈**敬虔**〉を要求なさり、〈**敬虔**〉を備え与えてくださる神だけが〈**今のいのちと来たるべきいのちを約束**〉してくださるのです。

パウロもテモテも、そして私たちも、生まれながらに「不敬虔」でしかない罪人です。

〈不義によって真理を阻んでいる人々〉—まさに私たちです—〈のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されている〉（ローマ 1:18)のです。

しかし、イエス・キリストが私たち〈不敬虔な者たちのために〉十字架で〈死んでくださいました〉（同 5:6)ので、神はこのイエスを信じる私たち〈不敬虔な者を義と認め〉（同 4:5)てくださる（言い換えれば、「不敬虔な者を敬虔な者と認めてくださる」）のです。

このようにして〈神は私たちに對するご自分の愛を明らかにしておられます〉（同 5:8)。

ですから私たちはキリストによって〈神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです〉（同 5:9)とパウロを通して神は私たちに〈**今のいのちと来たるべきいのちを約束**〉して下さっています。

そして一人一人に〈キリスト・イエスの立派な奉仕者〉になるよう呼びかけています。

ですから、いくら自分の中には〈**敬虔**〉が全く足りない、あまりに小さいと思っても（実際そうなのですが）失望してはならず、反対に神に対する希望と熱意をもって〈**敬虔のために**〉つまり〈**敬虔**〉に向かって、〈**敬虔**〉を神に求めて〈**自分自身を鍛錬**〉しましょう。

その〈**鍛錬**〉は、何よりも〈信仰と良い教えのことば〉即ち〈神のことば〉と〈祈り〉によって（つまり聖書を読んで神に祈りつつ）、神のみこころを求め、神に〈自分が従って〉するのです。

なお残っている自分自身の罪と戦い、更に世の罪と戦うことです。

今なおコロナ禍が収まらない中にありますが、人間と感染症の歴史から聖書的神学的に考察したある牧師は次のようなことを語っておられます。

「感染症の流行拡大は、確かに人間の文明社会の金銭欲、物欲、権力欲など、ひたすらな欲の追求・貪欲（それが植民地支配や戦争となって現れる）に対する神のさばき・警告であった。しかし同時にそれは、『支配する者もされる者も、金持ちでも貧乏でも人は皆死ぬのだ。自分もいつ突然死ぬか分からない。』ということの人々に思い知らせ、真剣に神に救いを求めさせる神の恵みでもあった。それは教会の改革（宗教改革）にもつながっ

た。また社会の医療福祉制度や公衆衛生、生活の倫理道德の改善にもつながった。」と。

コロナウィルスに感染しないように全力で予防し、もし感染し発症したら治療を受けて快復を目指すという「衛生」は言うならば〈**肉体の鍛錬**〉に当たるものと言えるでしょう。

パウロは「それも〈**少しは有益です**〉」と肉体の〈**今のいのち**〉の大切さを教えながら、同時に〈**今のいのちと来たるべきいのちを約束する敬虔は、すべてに有益です**〉と言って〈**敬虔のために自分自身を鍛錬**〉することはもっと大切だと教えました。

ですから、「〈**肉体の鍛錬**〉か、そうでなければ〈**敬虔の…鍛錬**〉か」ではなく、「〈**肉体の鍛錬**〉も〈**敬虔の…鍛錬**〉も」ということになります。

または、〈**少しは有益**〉な〈**肉体の鍛錬**〉は〈**すべてに有益**〉な〈**敬虔の…鍛錬**〉に含まれると言ってもいいでしょう。

ここでパウロの言わんとしていることを、16世紀宗教改革者のカルヴァンは次のようにまとめています。

「私たちは、敬虔に満ちた生き方に、ひたすらまい進すべきです。もし、私たちが、敬虔を学び知ったならば、神はそれ以上のことを、私たちに対して求めてはられません。ですから、たとえ私たちが、体の鍛錬に励むとしても、敬虔への熱意を妨げない程度に、あるいは、敬虔への熱意を鈍らせない程度にそうすべきである。」

またカルヴァンより少し前の、やはり16世紀宗教改革者のルターは、1527年にペストが流行したときに次のように言ったということです。

「私はまず神がお守りくださるようにと祈る。そうして後、私は消毒をし、空気を入れ替え、薬を用意し、それを用いる。行く必要のない場所や人を避けて、自ら感染したり他者にうつしたりしないようにする。私の不注意で、彼らの死を招かないためである…。しかし、もし隣人が私を必要とするならば、私はどの場所も人も避けることなく、喜んで赴く。」

これら宗教改革者たちの言葉に〈**敬虔の…鍛錬**〉と〈**肉体の鍛錬**〉〉の間のバランスのとれた、秩序立った関係が言い表されているように思います。

今のコロナ禍がこの先どうなるか分かりませんし、今のコロナ禍が過ぎ去ったとしても、また何年後、何十年後かには別の新しい感染症が流行することも大いに考えられます。

ですから、私たちはどんなときでも、生涯、イエス・キリストを信じ、神のことばである聖書を読み学び、神に祈りつつ主イエス・キリストに従う〈**敬虔の…鍛錬**〉にとにかく励んでいきましょう。

〈**肉体の鍛錬も**〉敬虔への熱意を妨げない程度に、あるいは、敬虔への熱意を鈍らせない程度に〈**少しは**〉行いつつ。

そして、そうであれば、国の為政者に対しては、戦争準備（兵器の製造売買や基地建設）や私腹を肥やすことに金（税金）を使わないで本当の「公共の福祉」のため、医療や様々な福祉制度の整備拡充のために、人権擁護のために、平和のために使うように求めてもいきましょう（神のみことばに従って、祈りつつ行なうなら、それは単なる「政治社会運動」ではなく、それも〈**敬虔の…鍛錬**〉のひとつです）。

それを考えると、先ほどの〈食物〉の話しにしても、「信仰があり、真理を知っているあなたは神に感謝して、好き嫌いなく何でもよく食べなさい。」と暗に勧めているのではとさえ思えます。